武蔵野日曜聖書講筵　聖霊降臨節祈祷会

霊的光臨

――使徒行伝第２章１～４節、詩篇第33篇１～６節――

１９９４年５月22日
小池辰雄

聖霊のバプテスマ　身交　エホバに在ってよろこべ　無弦の琴　初めに霊言ありき　一如無分裂　終り無き詩　キリストの生命の中に

【使徒２】

１五旬節の日となり、彼らみな一処（ひとところ）に集（つど）い居りしに、２烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、３また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人（おのおの）のうえに止まる。４彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣（の）べしむるままに異邦（ことくに）の言（ことば）にて語りはじむ。

【詩篇33】

１ただしき者よエホバによりてよろこべ、讃美はなおきものに適（ふさ）わしきなり。２琴をもてエホバに感謝せよ、十絃（とおお）のことをもてエホバをほめうたえ。３あたらしき歌をエホバにむかいてうたい歓喜（よろこび）の声をあげてたくみに琴をかきならせ。４エホバのみことばは直く、そのすべて行いたもうところ真実（まこと）なればなり。５エホバは義と公平とをこのみたもう、その仁慈（いつくしみ）はあまねく地にみつ。６もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、てんの万軍はエホバの口の気（いき）によりてつくられたり。

●聖霊のバプテスマ

御霊・御言の親しき御導きのもとに、皆さんと一緒にここまで来ました。使徒行伝２章は聖書で霊的な最も不思議なところの一つかもしれません。

１五旬節の日となり、彼らみな一処（ひとところ）に集（つど）い居りしに、２烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、

響きがにわかに「天から起きた」という。

その坐する所の家に満ち、３また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人（おのおの）のうえに止まる。４彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣（の）べしむるままに異邦（ことくに）の言（ことば）にて語りはじむ。

これは「異邦の言」ではなく、異言です、非常に高次な異言です。こんなことは滅多に起

きない。歴史的な大事な場面ですからこういう驚くべき事が起きた。

沈黙の祈りというのは、

「キリストの中に自分を入れる」

ことです。何かお願いをすることではない。沈黙の祈りの中で、霊歌を歌いだしたり、全身が霊に撃たれてしびれてしまうことがある。そういう経験は、上から臨んでいる、正に「天より起こりて」ということ。これは、

「ありがたいな、凄いな」

と言って、疑わないで率直に受けとる。それが一番いい。信仰の世界は、考えたり疑ったりすることは禁物です。任せることです、普通の現実ではないから。観念的な集会だったら、そんなことは起きない。私が承っている集会はそんな観念の集会ではない。

私が阿蘇で１９５０年晩秋に手島さんと集会をした時に、何か霊界から光が臨んで、私は全身しびれてぶっ倒れた。

「あっ、これが聖霊のバプテスマか」

と、私は非常にうれしくて、あたりの自然を見たら、自然が光っている。あれははっきりと聖霊のバプテスマだった。

教会であろうと、無教会であろうと、何教会であろうと、そんなことはどうでもいい。問題は、我々一人一人が一対一で

「神―キリスト―我」

の直結の関係で――垂直関係です――本当の世界に入ること。御霊のバプテスマはこの垂直の、霊的な光の臨む現実です。これが使徒たちが体験した世界です。使徒たちはみな参ってしまったんだ。でなければ、キリストの使徒には本当はなれない。

パウロはダマスコ途上でひっくり返された。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と、復活のキリストの声が響いてきた。あれがパウロの聖霊のバプテスマです。三日三晩、目が見えずものが食べられず、アナニヤという霊的な人に按手されて、

「わが目より鱗（うろこ）のごときもの落ちたり」

ということになった。パウロはダマスコ途上で聖霊のバプテスマを受けてガラリ変わった。今までクリスチャンを迫害していたが、とんでもない間違いをしたと。使徒行伝９、22、26章に書いてある通りです。

●身交

捨身（すてみ）というのはキリストの中に捨身する。他へ捨身してはダメです。キリストの中に捨身すれば、エライことになる。「主さま！」と沈黙の叫びをすると同時に、キリストの中に自分を棄てる。いいですか、二つの関係ではない。一つです。「信交」（信仰）の現実は一つ

でなければいかん。「しんこう」とは

「身交」

身体が交わる世界です。信じ仰いでいる「信仰」ではない。

「我がキリストか、キリストが我か」

という、そういう身交の世界です。全存在がキリストの中に入る。そうすると、我々の普通の身体がその現実で霊化されてしまう。何だか知らないが、エライことになってしまう。力がきて、生命がきて、光がきて、しょうがない。そういうしょうがない世界です。決して、疑ったり考えたりする必要がない。十字架・聖霊に在る祈りというものは、考えは要らない。無条件です。そういう意味で本当に十字架を受けとっている人があまりいない。

「十字架は贖罪である」

と、ただ観念的に受けとっている。さすがは、パウロは、

「われキリストと共に十字架されたり、最早われ生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生きたもうなり」

と告白した。ガラテヤ書2章20節のあの言葉は非常に大切な言葉です。

聖書は、

「あ、これは凄い言葉だな」

という所はちゃんとラインを引いておきなさいよ。そして、そういう所を本当に身につけたら、もう他は自然に解けてくる。なにもたくさん読む必要はない。そういう御言が身の中に入っていると、聖書を持っていなくたって、どこであっても、その御言が響いてくる。私は夢の中でよくそういう現実に入る。夢か現(うつつ)かわからない。ありがたいよ。寝るときには、

「キリストさま、あなたの懐の中に入って寝ます」

なんて祈って寝るものだから、時々そういう現象がおきる。私みたいにバカ正直な簡単な男はあまりいないらしいな。皆さんは利口すぎるんだ、もっとバカにならないと。「大バカ三太郎」にならなくては。それが

「幼子(おさなご)の如くならずば」

という世界なんです。幼子というのは、そのまま全的に受けとるからね、全的に泣いたり、全的に喜んだり。あの全的な姿がキリストは好きなんだ、泣いても転んでも笑っても。

●エホバに在ってよろこべ

詩篇33篇を開きましょうか。私は詩篇33篇というのは詩篇の中の非常に大事なものの一つだと思ってます。

「1ただしき者よエホバによりてよろこべ、讃美はなおきものに適(ふさ)わしきなり。」

（詩篇33・1）

旧約だから「ただしき」とか「なおき」とかいっているけれども、ただしくなくたっていい。

「エホバによりて」というのは
「エホバに在って」
ということ。
「エホバに在ってよろこびなさい。お前は何でもいいから」
ということです。
「**ただしき者よ**」
というと、
「私はただしくないから困ったな、33篇は読めないな」
なんて、そんなことはいい。聖書の言葉を、もうひとつ奥の世界でつかまえなければダメです、聖書の言葉に制約されるようでは。聖書は暗号にすぎないんだから。こんなデタラメなことを言うのは私の他にいないだろうね。しかし、これはデタラメではない。聖霊の光でもって私はそういうことを言っているんだから。パウロやキリストが旧約を引用するときに、旧約の文字のままではない。作りかえてしまっている。ご無理ごもっともに、
「聖書にはこう書いてあります」
と言って、文句にこだわったらダメです。文句の奥の世界なんだ。本当の響きを受けとらないといかん。
「ただしき者よ」というのを、もし私流に言うなら、
「キリストと垂直関係になった者よ」
ということ。垂直関係になればいい。こっち側はどうでもいいんだ。とにかく、真っ直ぐの関係になること。これが「ただしき者」ということです。自分が道徳的にただしいということではない。
「[1]**ただしき者よエホバによりてよろこべ、讃美はなおきものに適(ふさ)わしきなり。**」
（詩篇33・1）
これを文字通りに読んだら困るよ、
「私なんかこの第一行はこのままでは読めません。私はただしくもなおくもありません」
と言いたくなる。
「何でもいいから、エホバにより頼め、讃美しろ」
ということです。

●無弦の琴

「[2]**琴をもてエホバに感謝せよ、十絃(とおお)のことをもてエホバをほめうたえ。**」**（詩篇33・2）**
楽器というのはいいものだね。楽器がなかったら、自分自身が琴になればいい。一番素

晴らしいのは弦の無い無弦の琴です。目の見えない人が弦の無い無弦の琴を弾いている絵がある。あれは名画だ。我々自身が弦になる。弦は要らないんだ、無弦でいい。この糸は私自身ですと。そういう非常に弾力性のある魂にならなければダメですよ。

私は何も考えてない。ここで立たされると、上から来て、それでしゃべっているのだから。準備なんかしてない。聖書の字をじっと見ていると、その奥から響いてくる。

「3**あたらしき歌をエホバにむかいてうたい歓喜（よろこび）の声をあげてたくみに琴をかきならせ。**」（**詩篇33・3**）

「たくみに」は余計だ。たくみでなくたっていい。「たくみに」なんて、こんなことは書かなければいい。

「そうか、たくみでなければいけないのか」

なんて思う。余計な形容詞はいらない。

「聖書には形容詞がありません、いわゆる形容詞なんか考えるな」

と、私は言うんです。

「あたらしき歌をエホバにむかいてうたい」

とある。しょっちゅう新しいんです、私は繰り返しても新しい。ことに私は忘れっぽいからね。忘れるというのはいい恩恵だ。

●初めに霊言ありき

「4**エホバのみことばは直く、そのすべて行いたもうところ真実（まこと）なればなり。**
5**エホバは義と公平とをこのみたもう、その仁慈（いつくしみ）はあまねく地にみつ。**6**もろもろの天はエホバのみことばによりて成り、てんの万軍はエホバの口の気（いき）によりてつくられたり。**」（**詩篇33・4～6**）

この6節は素晴らしい節です。この「気（いき）」という字はルーアッハ（霊）という字です。エホバの口の息でもって天の万軍はできたという。

「**太初（はじめ）に言（ことば）あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。**」（**ヨハネ1・1**）

という「言は神なりき」というのは、

「言は神的なものだ」

ということです。あの「言」という訳は本当はいけない。

「**初めにロゴスあり**」

と、そのままギリシア語で言った方がいい。いわゆる言葉ではない。もし言うなら、

「初めに霊言（れいげん）ありき」

です。あるいは、

「初めに言霊（ことだま）ありき」

です。ゲーテはあれを

「初めに行為ありき」

と書いた。「タート」（行為）です。さすがはゲーテだ。

「行為が先だ。行為の裏付けがなくて語ったってダメだぞ。行為の裏付けのない言葉は空しい」

という。我々がものを言うときは、行為の裏付けをもってものを言う。

「これからしますよ」

ではなく、

「もう既にしましたよ」

と言う。

●一如無分裂

マリヤとマルタというのがいる。マリヤというのはキリストの言うことをジーッと聞いている。マルタというのは、いろいろな事を思っては行為している。行動的なんだ。しかしながら、マリヤのようにキリストにジーッと聞いて身体でその言葉を受けとると、それが自然に行為に転ずる。マリヤの方が本（もと）でなければいけない。マリヤでありかつまたマルタであるという両面を聖霊の世界では持つのが本当なんです。マリヤかマルタかではない。マリヤを根底としたところのマルタです。

本当に聞き受けとった者は行為に転ぜざるを得ない。何でも、二段構えはダメです、一如に連結していなければ。真理の世界は二段構えではない。二つの相があっても、それは一つの相の、切ることのできない相になっている。

「言うは易く行うは難し」

なんてことではダメなんです。どんなに難しくたっていいんだ。本当に言えば、その行がどんなに欠けたような行いでも、その言行は力がある。そういう一如の、分裂のできない世界が本当の世界です。

●終り無き詩

だから、未完成交響楽がいいんですよ、あれは完成したらダメなんです。完成とは終りということ。我々が地上ですることは未完成なんです。未完成が本当のすがたです。

「これでお終い」

というものはダメです。私の詩も終り無き詩です。ピリオドを打たない。最後は

「……。」

だ。これに限りない意味がある。

詩篇33篇の1から6節までは素晴らしい。

「天の万軍はエホバの口のルーアッハによって造られた」

という。やはり凄いね、この詩篇の作者は。預言者みたいな人たちはみなそういう高次な霊的な世界を知っているから。旧約から新約まで、神の霊は貫いています。

聖書はひとつも難しくない。余計なことはどうだっていい、そのポイントをちゃんとつかまえていけば。

「聖書はぶ厚いから困ったな」

なんて、ひとつも困らない。あなた方、そうやってピックアップしていったら、小さな素晴らしい聖書ができるよ。それを電車の中で読むといい。自分で聖書を造ってしまう。

●キリストの生命の中に

先週、皆さんのうち何人かがS君のお見舞いに病院へ行ったその晩、私は独りで祈りました。どういうように祈るかというと、

「病を治してください」

ではない。

「主さま、あなたがS君の中に入ってください。それが現実なら、その先をどうなさるかはあなたの御意のままです」

と祈った。とにかく、S君がキリストと一つになって、病床において力を得ること。それだけを私は祈りました。S君は多分その境地に入って、もう、いつこの世を去るとか何とかいうことを問題にしない、

「キリストの生命の中に入ってください」

と、これが私の祈りで、今でもその祈りです。人間はどうせ――どうせなんていうとおかしいけれども――いつかはこの世を去るわけですから、

「大事なことはキリストと一つであるか」

ということ、この一点なんです。それならば、いつ、今晩、仆れようと一向差し支えない。我々の信の現実は、そのような永遠の質をもった、キリストと一つとなるということです。私の神交はこの頃非常に簡単です。そういうことで、S君のためにも、

「あなたが一つとなってやってください」

と、これだけです。そうすれば、癒そうと思えば、キリストは癒し給うし、そうでなければ、そのままだし。そういうような祈りを私はいたしました。